

2024年 年頭所感 歳はとりたくないもんだ！

明けましておめでとうございます。

さは言いながら、西方穢土からの赤紙が届くのもさほど遠くない瘋癲老人にとっては、“目出度くもあり目出度くも無し”というのが偽らざる心境ではあります。

さて、八十路の峠を越えて心身共に衰退の一路を走っているワタクシ奴(メ)はもう自分の足で登る体力も(従って気力も)すっかりどこかに返上しましたが、若い頃の昔の山の記憶に未練たらしき引きずられている貧乏根性が我ながら誠に情けない次第でございます

歳を取って脚力が弱くなっても、何とか山に登れないものかとイロイロと岳界の噂を調べてみました。古くは明治の大財閥・大倉喜八郎が自社所有地の南アルプス検分と称して自分と数多の大奥の女人を籠に乗せて担がせ、また風呂桶や酒樽なども担がせて200人のポーターを従えて赤石岳に登ったという大名登山の伝説もあり、また新しくは三浦雄一郎がアンデス・アコンカグア峰の頂上近くまでヘリで運んで貰ってスキーで滑降するという計画(結果は高山病&体調不良のためにヘリでも登れず)も記憶に新しいところです。

しかし、当然の事ながら、貧者の小生には爪の垢を穿っても左様な資力は毛頭無く、尊敬する某先輩が言われる「“筋力”の劣化は乏しい“金力”で補って、装備の軽量化に努めること」が出来る程の財布の余裕も無いところが哀しいところでございます。

左様なことから、大名旅行やヘリ登山は論外として、何とか体力を使わずに、また左程の余分な経費も使わずに、一応は己の衰えた足でも何とか登れる方法は無いものかと猿知恵を巡らせてみたところ、なんと“素晴らしい”方法を思いついたのであります。

それは、灯台元暗しの言葉どおりに、誰でもすぐ思いつく方法でありましたが、現役の頃にはチョット恥ずかしくて口にできないような方法でありました。名付けて曰く「超低山・他力動力登頂&重力下山方式」。“超低山”という文言が付くのがこれまた悲しいところでございます(今では標高1,000m程度の山が関の山で、脚力が一層衰えた現状では標高200m程度の里山頂上からの下山でもハアハア・ヒーヒーです)。

「他力動力登頂&重力下山方式」というのは、文字どおり頂上付近までロープウェイやバスなどの乗り物のお世話になって歩かずに登り、下山のみ左右の足を交互に前に出すだけで重力のお世話になって脚力を使わずに下山できるという安直登山の方式であります。

里山ハイキング程度の幼稚園の遠足ライクの山歩きコースであれば我が衰えた脚力の範囲でも快適?!な遠足を楽しめますが、例えば谷川連峰の天神平までロープウェイで登り、下山は昔の行者道であった旧天神峠から保登野沢を降って谷川温泉に下るなどというルートでは死ぬ目に遭って大往生しましたので、ある程度の標高があって、しかも頂上まで公共交通機関で登れて、下山路も普通の登山道が下っているような山を探すのが我が体力では至難の技になりつつあることも事実です。

恥ずかしながらご参考までに、上記の谷川連峰・保登野沢の失敗記駄文を次頁に再掲しておきますので、小生の乏しい実力の程を推測する手掛かりにして下されば幸甚です。

『猿知恵の魂胆、その結果は斯くの如し』～谷川連峰・保登野沢の失敗記～（再掲）

情けないことに、齢 75 歳を過ぎてから急速に老齡化が進み心技体とも全く役立たずとなった。特に体力の老朽化はその際たるもので、歩行スピードと歩行持続時間が激減した結果、普通の登山コースでも標準コースタイムの 2 倍以上の時間が掛るようになってきた。このことは即ち、標準コースタイムで言えば往復で 3 時間程度の超短距離ルートしか登れないということである。

かかる状態では、近郊のウラヤマや里山の幼稚園児遠足向けのお散歩コースを辿るのが関の山という情けない塩梅となって、かつてはヒマラヤ、アンデス、欧州アルプスで鳴らしたワタクシ汝としては実に立つ瀬がない。

齢を取っても尚矍鑠として体力維持増強トレーニングに励み、また老境にこそ相応しい山行の在り方も研究して“老いて益々ご活躍”の先輩諸氏も居られるが、ワタクシ汝は自慢ではないが体力維持増進トレーニングなどは全くやったことがなく、また、老境の中でこそ相応しい登山の考え方や山歩きの方法などについても研究したことも考えてみたことも無いという怠け老人である。

このような怠け癖に恰好の弁解を与えてくれたのが昨秋に体調を崩して発病した業病（間質性肺炎）であった。この病気は国の難病に指定されているので、この病に罹ったことに拠る体力・気力の激減は大手を振って堂々と弁解できるというシロモノであり、小生にとっては“山が遠のいて行く”言い訳をするための格好の特効薬でもある。

（余談であるが、この病気は、肺が吸い込んだ空気から酸素を取り込む役目を担っている肺細胞がコンクリート化した為に、急激な運動をすると直ぐに息切れが起こり、例えば日本の山でもハードな登山は勿論のこと、普通の縦走登山なども出来なくなったことは事実であるが・・・）。

さて、そこで無いアタマを捻って考え出した“猿智慧”が下記のようなシロモノだった。これは老境にあっても未だ未だ若かりし頃の“栄光”が捨てきれない癡癡老人にはちょっとした特効薬のネタだと思うので、恥を忍んで紹介する次第であるが、お読み頂ければお分かりになるように、やはり凡夫の猿知恵の域を出ないどころか、“無謀な癡癡老人、無謀登山で遭難”という結末になること必定であるから、下記のような小生の事例は決して真似をされないようお願いしたい。

さて、上に述べたような体力では重力に逆らって登って行くのはすっかり厳しくなったので、同じ登山ルートを辿るにしても頂上までは“他人の足”で登って、自分の足は重力が仕事をしてくれる下山ルートだけで使うという安直な方法は無いものかと廻らないアタマを捻ってみた。

古くは大財閥の当主大倉喜八郎が自社所有地の南アルプス検分と称して自分や数多の大奥の女人を籠に乗せて担がせ、風呂桶や酒樽なども担がせて 200 人のポーターを従えて赤石岳に登ったという大名登山の伝説もあり、また新しくは三浦雄一郎がアンデス・アコンカグア峰の頂上近くまでヘリで運んで貰ってスキーで滑降すると言う案（結果は高山病のためにヘリでも登れず）も記憶に新しいところである。

しかしながら当然の事ながら、貧者の小生には爪の垢を穿っても左様な資力は毛頭なく、尊敬する某先輩が言われる「筋力の劣化は乏しい金力で補って、装備の軽量化に努める」ことが出来る程の財布の余裕も無いところが哀しいところある。そこで一計を思い付いたのが、頂上に近い場所までロープウェイか何かに通じている山なら、登りは若干のロープウェイ料金で稼ぐことができ、そこから下るだけなら大した体力も要らないのではないかという案であった。

このような山は探せば結構各地にあるのではないかと思うが、まずは手近な所では谷川岳ロープウェイを使う手はないか考えた次第である。

情けないことに、もう谷川岳本峰頂上まで登る体力も気力も無いが、ロープウェイ終点の天神平から下れるルートでしかもちょっと通向きと自慢できるルートはないものかと物色したところ、昔の修験者が谷川岳登拝に使った修験道であった旧天神峠(1,350m)から保登野沢経由で谷川温泉に下るルートが目についた。下山の標準コースタイムは2時間というから、我が劣化した脚力のゆっくり歩行ペースでも3~4時間もあれば御の字であろうと踏んだ。

天神平から旧天神峠へは、天神平スキー場がオープンするとスキーヤー以外は通行禁止になるので、2022年冬のスキー場オープン予定日12月1日ギリギリ直前の2022年11月27日に急遽思い立って試してしてみることにした。天神平までロープウェイで上がってみると、天気掲示板には強風と降雪のマークが出されていたが、スキー場には積雪は全く無く、僅かに天神峠付近に先日の残雪の名残が薄く残っている程度であった。上空には黒雲が早いスピードで流れていたが、所どころに青空も見えていたのでルンルン気分ですまずは旧天神峠目指して登って行った。

旧天神峠の古びた道標は倒壊していて「保登野沢方面へ」の標板も朽ちて地面に転がっていた。道は高倉山の南斜面を下るように付けられていて、初めの内は保登野沢の深い溪谷や麓にあるホワイトバレースキー場、谷川温泉などの俯瞰がのんびりと楽しめるノンビリ道であったが、下るに連れて段々と怪しいコース状況に変化していった。旧天神峠の倒壊した道標の有様が何かを暗示しているようであった。



(旧天神峠。保登野沢は右奥下へ。左奥の山は高倉山)



(旧天神峠付近から谷川温泉方面をルンルン気分で俯瞰)

怪しいルート箇所に出くわした初っ端は、小さな沢を横切っている登山道が土砂崩れで崩壊している場所で、壁に叩きつけられた蛙よろしくズルズル滑る急な山腹斜面を手足を八の字に延ばして高巻トラバースをしなければならなくなった箇所が出て来た。ホールドになるような樹木や岩角は何も無く、僅かに生えていた雑草の茎束も握っただけで剥がれて抜けてしまうという塩梅で、土砂壁に両手の指先と両足の靴先を僅かに突っ込んだ不安定なホールドだけを頼りに5m程のトラバースを強いられたが、足下はゴロタ石の落石の堆積で埋まった垂壁の井戸の底となっていて、もし足を滑らせればそのまま阿弥陀如来さまのご来迎という雰囲気のある場所だったので、久しぶりに昔やったロッククライミングでの墜落の恐怖が蘇り、心臓がパクパクしてきた。

ルートはこれ以外にも、ゴロタ石の急なトレンチ径の上に枯れ落ち葉が積み重なっていて、落ち葉も下に隠れたゴロタ石もよく滑った。滑って転ぶと運が悪ければ谷底まで滑落しそうな塩梅であった。また、斜面に付けられた細い径の路肩が崩れていて、足が置けるような平場が消失してしまっている場所もかなり沢山あった。ここもズルズル滑る落ち葉の急斜面で滑れば谷底という場所だった。

怪しいルート箇所の圧巻は、径が保登野沢を徒渉している箇所が3箇所あって、橋などは勿論のこと踏み置き石などの人工的設置物は何も無く、飛び石伝いにも渡れないので靴を脱いで裸足になって徒渉

したが雪解け水は足を切る程冷たかった。徒渉点を示す道標や踏み跡なども無かったので、このルートを登ったことがあるベテラン経験者同行でないとかかなり厄介なことになると思われた。

以上のようなコースであったから、旧天神峠から谷川温泉に下り終えるまでに標準コースタイムの3倍近い5時間半を要し、谷川温泉から水上駅まで日が暮れた真っ暗闇の中の山道を歩かなければならない羽目に陥った。この小生の所要時間対標準コース時間の差は、小生の遅足の所為もあるが、かなりの部分は上で記したようなルート上の問題箇所の通過に手間取った結果であった。

問題箇所を通過するのに手間取れば、山中で草臥れ果てたり、タイムアウトで真っ暗闇になったりして道を失ったりする危険性が少なくなく、真夏なら兎も角、冬に入ったこの時期には遭難の代償も大きなものになるであろう。

以上の小生の恥ずかしき事例は、横着をして楽なコースで逃げ切るといふ魂胆だったのであるが、やはり谷川岳大明神さま（正確には富士浅間大明神）はこのような魂胆を見逃してくれる筈はなく、今回の問題も遭難事故に至らなただけでもマシというモノであろう。小生も谷川温泉に辿りついた時にはヘトヘトに草臥れ切っていた。悪場や徒渉で神経を使い果たしたことも身体的疲労以上に精神的にも疲労した結果と思われる。谷川温泉から水上駅までの歩行はもうフラフラの態であった。

やはり猿智慧は猿智慧にしか過ぎなかった。読者の皆様も猿智慧の小生の愚を重ねないように、恥かしながら失敗作を紹介した次第である。

[保登野沢コースへの補記]

コースの途中には近年設置されたと思われる赤テープがあったが、径は暫くの間歩かれた形跡が全く無かった。また、廃道か獣道に変化しているような箇所が沢山見られた。このような個所では滑落の事故が起きても不思議ではなく遭難事故の結果もシビアなものになると思われる。従って崩れた登山道を修復するか、或いは廃道にして立ち入りを禁止しないと早晚重大な遭難事故発生の危険性が高いと思われる。

(山行日：2022年11月27日 単独 同月28日 記)

さて、上記のような超安直ハイキング（「超低山・他力動力登頂&重力下山方式」）が体力激減の高齢者向きであるとしても、そのような安直幼稚園生の遠足ばかりやっているのも能が無い。さりとて昔取った杵柄は再び取ることができない夢のまた夢と消えてしまっている。さすれば、残るは、昔の登山の楽しみの三要素と言われた「計画、実行、記録（記憶）」の最終段階の「記憶（を思い出す）」という手が残っていた。

最近ではTVの番組などで世界の山々の映像が放映されるようになったので、昔登った海外の山々の映像を見る機会も増えた。しかし、これらの放映番組はタレントなどを使ったヤラセ的な番組なども多く、やはり、自分が実際に行き撮影してきた山々の写真を眺めながら当時を追憶するのがベストではなかろうか。

そのようなことから、「記憶の追憶」はある意味では自己中心的な所業ではあるが、マ、もう現地には行こうにも行けない瘋癲老人にはお許し頂けるかと思う次第である。そのようなことから、昔行った海外の山々の写真をデスクトップの背景画面に交互に貼り付けて当時の思い出に耽っているのであるが、やはりこのような所業はある意味では退嬰的の誹りを拭えないことも、これまた事実ではある。

次頁の写真はそのような海外の山の写真の幾つかである。それらは麓から眺めただけの山、途中でリタイアした山々であるが、今でもその折の情景が浮かんで来て懐かしい。

ヒマラヤ・アンナプルナⅡ峰 (7,937m)

2017年10月末、マルシャンディー川を遡ってチュルー・セントラル峰に登りに行った折に、マルシャンディー川対岸に見えたヒマラヤ巒が美しいアンナプルナⅡ峰。対岸から眺めただけ。帰途はトロン・パスを越えて聖地ムクティナートからポカラに帰るアンナプルナ・サーキット一周の旅となった。



(2017年10月末 筆者撮影)

欧州アルプス・ユングフラウ峰 (4,518m)

欧州アルプスにはガイドレスで3回行った。この見事な裳裾を牽いた若き貴婦人ユングフラウも登頂計画のピークの一つであったが、登頂ルート上の巨大なクレバスと巨大雪崩のデブリに恐れをなして手も足も出なかった。一番易しいブライトホルンとアラリンホルンの2峰にガイドレスで登れただけだった。



— 4 — (2014年7月下旬、同行の赤澤東洋氏撮影)

北米 マウント・レニア峰 (4,392m) 2016年7月

マウント・レニア登山、オリンピック半島自然観察トレッキング、シアトルのボーイング航空機工場見学という目一杯の目論見をぶら下げてシアトルに出かけたが、70リットル25kgという重いザックに辟易して、ほんのトバロのミューア・スノーフィールドに入る手前のパノラマ・ポイントで一服したら再びザックを担ぐ気が失せてリタイアしてしまった。ところが、麓のロッジ（ロングマイア）に戻る足が無い。たまたまパラダイス駐車場で荷台に拾ってくれたオレゴン州の牧場主の荷物車の荷台で揺られて戻った。目的のマウント・レニアには怠けて登れなかったが、その他は有意義な旅となった。



(2016年7月下旬、筆者撮影、頂上に掛る笠雲に注意)

北米 グランド・ティートン峰 (4,197m) 2013年6月下旬

イエローストン国立公園のすぐ南側のグランド・ティートン国立公園の中に聳えるグランド・ティートン峰はワイオミング州のロッキー山脈に位置する岩山である。今回のメインの山はこの山であったが、体調が悪く途中の鞍部手前の氷河上で敗退した。

しかし、麓のジャクソン湖畔のキャンプ場にテントを張って過ごした2週間は非常に楽しい毎日であった。



南米アンデス山脈アコンカグア峰（6,962m）2002年12月、2003年12月

アコンカグア峰は南米大陸の最高峰ではあるが、一般ルートであれば左程困難な箇所も無いので大勢の登山者が訪れるポピュラーな山である。しかし、灼熱の南米だけあって、登山口から BC のプラサ・デ・ムーラスまでのオルコネス渓谷の遡行は2、3日間掛る灼熱地獄&砂漠であった。また、BCから頂上までは2泊3日の高山病と寒さとの闘いであった。

2年続けて挑戦したが、1回目は高山病で、2回目はオルコネス渓谷上部の路傍にデポしておいた高所テントや高所服が盗難に遭って姿形も無くなり、低温が激しいキャンプ・ベルリンから少し登った地点でリタイアせざるを得なかった。

また、登山基地があるアルゼンチンのメンドーサは日本とは丁度地球の反対側で、しかも直行便が無く、USA 経由やヨーロッパ経由で搭乗時間が30時間も掛るから現地に入るだけでも難儀であった。

アコンカグアの山頂には立てなかったが、パタゴニア、ウルグアイ、イグアスなどにも旅ができて楽しかった。



2024年元旦 記

（本項 完）